生徒の自己評価を生かした道徳科の学習評価の実践研究
-生徒の記述から学習状況や道徳性に係る成長の様子を見取る実際を通して-

高度学校教育実践専攻　　実習責任教員　藤　井　　伊　佐　子
教職実践力高度化コース　　実習指導教員　泰　山　　裕
山　田　　慈　子

キーワード：道徳科の評価，自己評価，道徳ノート，ポートフォリオ

Ⅰ実践研究の課題設定

実習校は，学校経営方針の重点的取組を「教育活動全体を通した，生徒の心を耕す取組の実施」とし，道徳教育を推進してきた。また，近年の生徒の実態は，全国学力・学習状況調査の質問紙調査の結果を用いて分析し課題を明らかにした。これらから，生き方に関わる根源的な資質・能力としての道徳性を育む道徳科の実践を充実させる必要があると考えた。道徳科は，今年度から通知表・指導要録に記述の評価が始まった。多くの教師はこのことに不安を抱えていた。そのような現状も踏まえ，実践研究では，道徳科の評価を中心に検討を行うこととした。

Ⅱ先行研究・先行事例の分析

1 ポートフォリオ評価と子供の自己評価

田中（2019）は，子供の学習過程での成長を見取る適切な評価方法，真正の評価としてポートフォリオ評価を挙げている。

西岡（2009）は，ポートフォリオ評価の意義として，教師が子供の学習の実態を具体的・継続的に把握し授業構想につなげることができること，子供自身が学習の実態を自覚する機会になり自律的に学習を進める力が身に付くこと等を挙げている。

2 道徳科の学習評価の基本姿勢

中学校学習指導要領解説道徳編(2017)では，目標に掲げる学習活動において生徒の具体的な取組状況を一定のまとまりの中で学習活動全体を通して見取る，大くくりなまとまりを踏まえた評価とすることや，生徒の成長を積極的に受け止めて認め，励ます個人内評価として記述式で行うこととしている。

2 道徳科における自己評価の意義

植田（2017）は，自己評価は，自らの学習状況を確認・調整し，主体的な道徳科の学習を目指す上でも重要な活動となる。継続することで，自己内の基準が形成され，子供の評価力は高まっていくと述べている。

押谷（2018）は，道徳科の評価は，子供が自己評価力を高め，自己指導できる力の育成に資することが大切である。授業での気付き等を自己評価したり，学期末に心に残っている授業や授業を通して自分が成長したことを書いたりするものとして，ノートやワークシートが考えられる。ノートは，学習の積み重ねと成長の実感，教師からの励ましの評価も具体化したり，ポートフォリオ的評価に使ったりすることができると述べている。

Ⅲ実践研究の実際

1 研究体制の確立

(1) 校内道徳部会との協働体制

今回の改訂では，学習指導と学習評価の一貫した取組や，これらを中核としたカリキュラム・マネジメントが強調されている。実習校の校内道徳研修組織は，道徳教育推進教師を中心とした道徳部会が，各組織と連携を図る形で構

成されている。筆者は道徳部会に所属し，実践や研修を協働しながら実践研究に取り組んだ。

(2)教育課程の作成

昨年度末に,道徳教育全体計画の作成に係り,育てたい力の焦点化に関するアンケートを作成し，管理職や道徳教育推進教師に協力を得て全教師に実施した。その集計結果と分析に基づき,道徳部会で重点目標及び重点内容項目を吟味し,全体計画,別葉,年間指導計画の作成を行った。

(3)重点的取組の共有

① ローテーション道徳による組織的な実践

教師が交代で学年の全学級を回って道徳の授業を行う，ローテーション道徳を導入した。指導を計画的に推進し，授業を魅力的なものにするためには，全教師が協力して取り組むことが大切である。また，評価の面においても有効である。実施に際して,授業分担をする学年会や,教材等の共有を円滑にする環境整備を行った。

② 「考え，議論する道徳」の土台づくり

生徒の道徳性は，道徳科の授業の中で安心して自分の本音を語ったり，よりよい生き方について前向きに語り合ったりできる，温かな心の交流の下に育まれる。このことを踏まえ，まず「考え，議論する道徳」の土台づくりが必要だと考えた。授業で大切にしたい3点を図に示した「道徳授業の学び方」を生徒と共有した。

③ 生徒が自らの学びを振り返る時間の確保

生徒が教材の道徳的価値を通して学習したことを言語化することは，自らの道徳性の育みにつながると考えた。終末で道徳ノートに学びや気付きを書く活動を必ず設定するようにし，各学習活動の時間配分の目安を提示した。

④ 学校全体で取り組む道徳科の評価

学校は，学習評価の妥当性，信頼性等を担保や，学習評価に対する説明責任を果たす責務があるため，組織的・計画的に評価行う必要がある。そこで，主な評価資料として道徳ノートと振り返りシートを用いること，それらを活用して評価活動を行うことを全教師で共通理解し，実践に取り組んだ。

2 道徳科の授業の質的転換

(1)指導方法の改善と学習評価の共通理解

① 第１回校内道徳研修

道徳科の指導力向上と評価の共通理解を目的として，提案授業・研究協議と評価の実際についての講義・演習の内容で研修を行った。提案授業は,「家族への敬愛」がテーマの教材「一冊のノート」で筆者が行った。研究協議では，議論する場面の設定，問い返しの工夫等の課題が挙げられた。県教育委員会指導主事による講義・演習は，実際の生徒の記述に基づいて行われ，1学期末の評価に有効なものであった。

② 第２回校内道徳研修及び市教育課程研究会

第2回校内道徳研修は，市教育課程研究協議会道徳部会の研修を兼ねて行われた。同地域の中学校における横の実践交流は，質の高い教育実践をしていく上で重要である。研究協議の内容や指導主事の助言は，参加者全員に還流し，今後の実践に生かせるようにした。

③ 互見授業

互見授業は，教師が日常的に授業を見合って研鑽する取組である。授業者と参観者の両者に指導力向上が期待できる。成果報告書では筆者が授業を行った，3 つの教材について，指導方法の工夫や改善点等を挙げている。

(2)教科等の道徳教育を補完する道徳科の授業

グローバルサポーター学校派遣を活用し，教科等の道徳教育を補完する道徳科の授業を行った。授業には，外国語指導助手（ALT）と4人留学生が参加し，世界平和を考えるとテーマに授

業を行なった。生徒は，話合いや，プレゼンテーションを通して，自らの考えを多面的・多角的に考えを広げることができた。

3 生徒の自己評価を生かした道徳科の評価

(1)道徳科の評価の全体構想

道徳科の評価は，まず「考え，議論する道徳」の授業の中で，生徒は自らの考えを道徳ノートに書き留めることに始まる。学期末には，道徳ノートに綴られた学びを生徒自身が読み返し，学習活動全体を振り返って，振り返りシートに自己評価をする。教師は，生徒の自己評価を生かしながら通知表・指導要録に記述の評価を行う。年度当初に，このような評価構想を全教師で共通理解し，学年部の全教師で協働して実践を行うことが重要である。実践中は，随時，道徳部会を開催し，各学年の実践状況の把握や調整，困りの解決を行うなど，常にPDCAサイクルを回しながら改善を図る必要がある。

(2)道徳科の評価資料と評価文の作成

① 1単位時間を見取る道徳ノート

道徳ノートは,学習指導過程や発問に沿って，自分や友達の考えを整理して書くことができるように構成されている。また，振り返りシートで一定期間の学びを振り返って自己評価する際に，ポートフォリオとして活用することもできる。授業者は，道徳ノートを回収し，１単位時間の見取り，評価をする。その際には，生徒の道徳性の気付きにアンダーラインを引いたり，コメントを記入したりすることで，生徒のよさや成長を認め励ますことが重要である。記述が少ない生徒は，授業者がその生徒の発表の内容や学習態度等をコメントとして残しておくことで評価を記述する際に役立てることができる。

② 一定期間を見取る振り返りシートの開発

道徳性を養うには，自分自身を客観的に振り返って評価する，メタ認知的活動としての自己評価が必要である。開発した振り返りシートは，正に生徒の道徳性を養うことを実現する自己評価活動を行うワークシートである。学期間の道徳科の授業を振り返ることで，生徒は学びを再確認，再構築し，自己指導・支援につなげ，自らの道徳性を育むことにつなげる。道徳科の評価は，学習活動に着目し，年間や学期といった一定の時間的なまとまりの中で，生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を把握することが求められている。振り返りシートの左ページは，生徒が学期間の学習活動全体を振り返り，自らの学習状況について自己評価する様式になっている。一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか，道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかといった,2つの見取りの視点における学習状況の例示を基に，実際の授業の中で見られる生徒の学習の様子をイメージしながら，更に学習状況を細かく分けて項目にした。右ページは，生徒が学期間の学び全体を振り返り，最も顕著な学びや気付きがあった教材について記述の自己評価をする様式になっている。記述の文章は漠然とした感想ではなく，見取りの２つの視点で振り返らせるようにするため，例文と書き方を提示し，見取の視点を生徒にも明確にして自己評価できるように工夫した。

③ 振り返りシートを活用した評価文の作成

林（2019）は，道徳科の評価の記述方法について，大くくりなまとまりでの評価と，具体的な例を挙げることを組み合わせた形を典型なものとしている。そこで，通知表の評価文の作成に当たっては，振り返りシートの大くくりなまとまりでの評価と，具体的な例を挙げることの部分を組み合わせた形で作成した。

Ⅳ道徳教育・道徳科のさらなる充実に向けて

1 今年度の研修と実践研究の分析

今年度の実践について，教師アンケートの記述結果に基づいて分析を行った。

(1)組織的な運営に関すること

全体計画，別葉，年間指導計画は，今後も生徒や学校の実態に合わせ，実質的なものとして作成する必要がある。今年度は，重点目標を意識した実践，他の教育活動と道徳教育との関連付けに課題が残った。

道徳教育推進教師を含む道徳部会，運営委員会，職員会議，学年部の組織体制は確立されていた。

(2)授業実践に関すること

ローテーション道徳については，教材研究，授業改善が促進された，指導力向上につながった,指導方法の共有が図れた等の利点があった。

友達の意見を温かく受け入れる学級の雰囲気は形成されつつある。「道徳授業の学び方」の意識付けは継続が必要である。

アンケート調査を通して，個々の教師が様々な指導の工夫をしていることが分かった。今後，互見授業や研修でそれらを共有することで質の高い授業の実現に近付くであろう。

道徳ノートは，生徒の考えが見える，記録が蓄積され，振り返りができるという利点があった。書く活動の時間設定と，書くことに困難さを持つ生徒の支援方法は課題が残った。

(3)学習評価に関すること

振り返りシートは，生徒の記述を生かして通知表の評価文が作成できる，自由記述ではなく書き方の視点が与えられている様式がよい等の利点があった。評価文の内容は，今後の実践を通して分析し，改善を図っていく必要があるという意見が多く挙げられた。しかし，本実践研究を通して，今後の研修課題を明確にすることができたことは，成果であると言える。

2 実習校における道徳教育・道徳科の展望

道徳科の初年度は，全教師で組織的に実践を進めていくことができた。実践や研修の目的を達成する上では，教師同士の協働が大切であることを改めて実感した。

今後，実習校の更なる道徳教育・道徳科の充実を図るためには，引き続き研修を積み重ねていくことが重要である。

Ⅴ教職大学院の学びと今後のキャリアデザイン

筆者は 3 年前に研究主任を務め，校内研究を推進する難しさを経験した。自らの研修が十分でないことを自覚し，教職大学院での学ぶことを決めた。教職大学院での授業は，これまでの教職経験を省察したり，理論や実践を学んだり，校種や地域を越えて共に学ぶ仲間と協働して新たな創造をしたり,充実した 2 年間であった。ここでの学びは，今後の教育実践を通して具現化していきたい。そして，いつまでも学び続ける教師であるために努めていきたいと思う。

参考文献

・林泰成（2019）「『特別の教科　道徳』の評価」『学校教育・実践ライブラリ Vol.3』ぎょうせい p26-p27

・市川伸一（2019）『新学習指導要領と「資質・能力」を育む評価』ぎょうせい

・文部科学省（2018）中学校学習指導要領解説道徳編

・永田繁雄（2017）『「道徳科」評価の考え方・進め方』教育開発研究所

・西岡加名恵（2009）『教科と総合に活かすポートフォリオ評価法』図書文化

・押谷由夫（2018）『中学校教育課程実践講座 特別の教科 道徳』ぎょうせい

・田中耕治（2018）『よくわかる教育評価［第２版］』ミネルヴァ書房